

湯川洋司の残した仕事

湯川洋史

1 はじめに

本稿は、湯川洋司（1952－2014）が独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業へ申請し、2011（平成23）年から2014（平成26）年までの4ヵ年計画で取り組んでいた基盤研究C(課題番号：23520986)「山村社会の「自律性」の民俗学的研究」(以後、「山村の「自律性」研究」とする)について紹介することを第一の目的とする。その際資料として湯川がすでに発表した文章のほか、「山村の「自律性」研究」研究計画書、同研究各年度報告書という日本学術振興会への提出書類といった公的な資料のほか、湯川が残した日記やメモ、調査ノートといった私的な資料を用いた。

また同時に、「山村の「自律性」研究」が、これまで湯川が行ってきた一連の研究のなかでどのように位置づけられるかも考えたい。これが本稿の第二の目的であり、これらふたつが本稿の目的となる。

2 「山村社会の「自律性」に関する民俗学的研究」について

(1)「山村の「自律性」研究」の申請書上において、湯川は「本研究は、日本の山村史上、人口が最も増大した1960年代と、その後の過疎化と高齢化の進行により「限界集落」化した2000年代の山林社会とを、熊本県五木村（日本の南の山村）と福島県只見町布沢地区（旧布沢村）（日本の北の山村）を対象地として、独自に設定する比較指標と各時代相との照合を通じて相互比較し、山村の存立に必要となる「自律性」とその確保のための条件を解析・抽出する。今日山村の存続が日本の国土保全上の緊要の課題となっていること、さらに「村的社会の再構築を求める社会的状況が見られることを踏まえ、山村及び「村」的社会的具体的な構想をするための一助とするとともに、具体的な事例研究に基づき山村の存在意義を問う一モデルにおいて提示することを目指す」と研究の概要を述べ、研究の特色および意義として以下の4点を挙げた。

1. 外社会の経済や作用による影響を受けやすいとされる山村生活を「自律性」という観点から指標を定めて考察することにより、山村社会の特性を抽出し、住民生活の質の確保と向上に資するための条件を、具体的事例を通じて明らかにしようとする。
2. 五木村では川辺川ダム建設計画の中止が見込まれ村の将来計画が真剣に模索され、五木村の人々が自らの手で村の自立と再建を志向し始めていること、また只見町布沢地区では廃校になった小学校分校を拠点に自律的村づくりを目ざした「森林（もり）の里応援団」の活動が動き始めていることを踏まえ、それぞれの動きと連携しながら、村の将来設計を考えるうえに寄与できる自律的山村像を創出するための条件

の解明を目指していること。

3. 戦後以降の山村史の展開を具体的に示す資史料の集成ができ、「戦後山村史資料集」としてまとめることで、山村史や山村誌の研究資料の作成として意義を持つ。
4. 村民が自らの眼前の現実問題を考えようとする動きと連携することを通じて、民俗学的研究が住民の暮らしや住民自治の向上を図る方法の一つになりうることを示すことができるのではないか、と期待している。

簡潔に湯川の目的をまとめれば、それはふたつに分けられる。ひとつは、「山村の存立に必要となる「自律性」とその確保のための条件を解析・抽出」し、「具体的な事例研究に基づき山村の存在意義を問うモデル」として提示することとなる。ふたつ目は、「戦後以降の山村史の展開を具体的に示す資史料の集成」である「戦後山村史資料集」の刊行となる。

具体的には研究を、「①比較指標の設定・モデル化(初年次)、②現地調査(第2～3年次)、③報告のまとめ(第4年次)の3つの段階に区分して進め」、「第1段階では、これまでの調査研究で収集した資史料を再読・再点検を行なうことともに、人口・世帯・経済・諸活動等に関する統計資料、各種のデータをさらに収集して分析を行い、1960年代と2000年代の各時代及び五木村と只見町(布沢地区)を相互に比較するための比較指標(案)を設定する。この比較指標(案)は、実地調査を踏まえつつ研究過程全体を通じて検討・修正を加え、各地山村の「自律性」を点検する「点検指標モデル」として提示・公表する。

第2段階では、五木村と只見町(旧布沢村)において聞き書きを中心とした実地調査を実施し、併せて史資料・記録類(写真も含む)を発掘・収集し、これらを出来る限りデジタル化して「戦後山村史資料集(I)(五木村編)」と「戦後山村史資料集(II)(只見町編)」としてまとめる。(報告書は第3年次と第4年次に印刷発行する)。

第3段階では、上記の五木村と只見町聞き書き調査内容と収集資料に基づき、山村の自律性の確保に焦点を絞って分析し、1960年代から2000年代のおおよそ半世紀にわたる山村社会の変動史を「山村民俗生活誌—日本の北と南の村の50年—(仮題)として報告文を作成する。(報告文の公表にあたっては別途図書として刊行を計画する)」というものであった。

上の文章を要約すれば、五木村と只見町をフィールドとして「山村の存立に必要となる「自律性」とその確保のための条件を解析・抽出」し、①「各地山村の「自律性」を点検する「点検指標モデル」」を提示・公表、②「戦後山村史資料集I・II」を刊行、③1960年代から2000年代にかけての山村社会の変動史である「山村民俗生活誌—日本の北と南の村の50年—(仮題)」を刊行することを目的として、4ヵ年計画で研究を進めていくということになる。

これが湯川の構想していた「山村の「自律性」研究」計画の大まかな概要となる。ここで用いられる「独自に設定する比較指標」とはなにか。そもそも、ここで湯川が言及している「自律性」とは具体的にはなにを意味するのだろうか。そして、なぜ「自律性」の研究が史資料集や民俗誌の刊行へとつながるのか。疑問は多く湧く。ひとまず、次に湯川の実際の調査活動を追うことによって、その「独自に設定する比較指標」について考えたい。

(2) 先に言及した「独自に設定する比較指標」についての明確な記述は、湯川の残したノートや手帳、また研究計画書類上にも見られない。唯一そのことに触れているのは、2011年9月3日の日記だった。そこには「民俗学は、生きる「場」を人々がどう作ってきたか。その現われを民俗として捉え、考える学問」という書き出しからはじまって、「その作り方の変化を、歴史として捉えることができる。(中略)五木村、布沢で考えてみる。具体的な家を事例として、その変わりようを「生き方」を考える。その視角として、①経済(生業) ②家族のつながり、構成 ③心のもち方(信仰、道徳、生活規範) ④つきあい(村との、外との) ⑤教育 ⑥食べ物(何をどのように食べてきたか)。それらを家族の個々人のレベルまでさがって点検し、現在をみる」ということが書かれていた。

「生きる「場」の創造を捉え、その変容から「生き方」を考えるという方法も重要だが、それとともに挙げられている「①経済(生業)②家族のつながり、構成③心の持ち方(信仰、道徳、生活規範)④つきあい(村との、外との)⑤教育⑥食べ物(何をどのように食べてきたか)」という分類案は、「独自に設定する比較指標」と直接的に関わる部分と思われ、注意すべき事柄だと考えられる。

実際の調査は、2011年9月2日から2014年8月30日までの間に計12回、総日数で48日間行われた。五木村に2回、只見町に1回滞在して行った調査の結果を踏まえた2011年度経過報告書には、「かつての食料自給的な生活における自立性を検討することに力点を置き、五木村では、かつての焼畑農耕と雑穀栽培、食料備蓄の方法等を、只見町ではかつての食料確保の実情と食料備蓄、戦後以後の賃稼ぎの展開に関する聞き書きを実施した。また、五木村の焼畑関係用具を多数収蔵する熊本市立博物館において、食糧確保を軸にした経済的生活面における比較指標案を得た。社会生活、信仰生活については不十分なため、今後考える」と書かれている。

このことから、比較指標には経済生活と、社会生活、信仰生活という3つが設定されており、そのうち経済生活は食料の確保と保存、焼畑や戦後の賃稼ぎなどのいわゆる生業が考えられていたことが分かる。

次に、2年次(2012年)の調査経過報告書には五木村にて「集会施設、常会、穀物貯蔵のための倉について資料を得た」こと、只見町にて「かつての年中行事と現在の年中行事、また最近の地域自治の住民の新しい動きについて」の予備調査を行ったことが書かれ、「比較指標(案)について、年中行事に関する指標を考察した。なお、社会生活については引き続き検討」とある。

3年次(2013年)の調査経過報告書は見つからなかったが、会津において「神楽などの村落行事について」調査していることが、ノートから分かる。2013年度は2012年度に刊行予定であった五木史資料集が予定通りに刊行できず、その刊行のための資料の確認や作業に多くの時間が割かれたようで、具体的な調査活動はあまり進んでいない。

ひとまず、ここまで見てきたことによって、比較指標は経済生活と、社会生活、信仰生活の3つが想定されており、具体的な事柄としては焼畑や賃稼ぎ、堂や集会所などの施設お

よびそこでの活動、穀物の貯蔵法や村落単位で行う年中行事、神楽などの芸能が想定されていたことが分かる。五木村や只見町は湯川が若いころより継続して入っている調査地であった。そのため、すでに調査していた過去の内容と照らしあわせながら、現在の変化を見ていこうとしたものと思われ、ここに上げた比較指標だけではなかったことは容易に想像できる。

次にその背景にある湯川のこれまでの研究を見ながら、そもそもなぜ「山村の「自律性」」という問題を考えるに至ったのか。そしてまた、なぜ湯川が山村史資料集と山村民俗生活誌の刊行という構想を持つに至ったのかを考えてみたい。

3 山村民俗誌の構想

(1) 湯川が「山村の「自律性」研究」の目的として掲げた自律性の抽出と史資料集の刊行は湯川が長年の調査で蓄積してきた成果と疑問の上に成り立っている。

湯川は、『変容する山村——民俗再考』の冒頭において、「山と山の暮らしの持つ意味について現代において再評価したい」と述べ、その理解のために山村の民俗変容を手がかりとする理由として、「山の暮らしの変容に大きな作用を及ぼした里との関係性のなかで考察する」必要性をあげている(湯川洋司 1991: i)。

この山の暮らしを民俗の変容を手がかりとして明らかにしようという問題意識は、これ以後の湯川の著作すべてに通底している。湯川にとって山を論じるということは、同時にそれとつながってきた里を論じることでもあった。湯川にとって山の問題はきわめて現代的な課題であり、それは山だけで完結する類のものではなかったのである。

「山に暮らすとはどういうことなのか」という疑問をしぼしば湯川は投げかけ、それに答えるかたちで、山の現代的意義を述べている(湯川洋司 1997: 2)。「山には山の暮らしがあった」はずだが、「それは、しかし、山の中だけで完結する性質のものではなかったはずである。日々山に入り込み、そこを舞台にして暮らしをたててきた人びとの営みが上流部にあったからこそ、下流域は水の危険性を回避しながらその恩恵を受けることができたのではなかったか。すなわちひとつの水系に沿って繰り広げられた暮らしは、それ自体ひとつの運命共同体めいたものであったということだろう」と述べ、「山の荒廃は里の危機をも招きかねない」というのに、「里だけになった日本はどうなるのか」と疑問する(湯川洋司 1991: 315-316)。

ここでいう川は地理上のつながりを指すものではないことは、かつての暮らしにおける河川の重要性を思えばすぐに理解できる。陸路の発達以前は、川は人とモノをつなぐ物流の基本だった。ここで湯川のいう「ひとつの水系に沿って繰り広げられた暮らし」とは、そうした人同士の実際的な交流やそこから生まれる文化的な交流も含んでいた。

湯川にとっての山は里とつながりながらも、里のあり方とは異なるあり方を示す場でもあった。それは先に引用した「山には山の暮らしがあった」という言葉によって端的に示された。この言葉に示された「山の暮らし」とは、山特有のあり方のことを指す。具体的にその暮らしというのは、「山を開いた焼畑、鳥獣を狩る狩猟、材木の伐採をした杣仕事、製材をした木挽、木材を搬出した木馬ひきや川流し、材木を細工した木地屋、炭焼き、鋤

山で働いた山師、川の魚をとる川漁、さらには山の草木を利用した道具作りから、漆掻きやハゼ採取」という「様々な山の資源を利用する知恵と技術に支えられてきた」暮らしであった(湯川洋司 1994: 24-25)。

そうした山の暮らしを支えてきた仕事のひとつである焼畑の持つ特性に、湯川は注目していた。焼畑とは、「山の木々を伐り、その枝葉を乾燥させ、火を入れて焼いて耕地を得る農耕地である。五木村ではコバとかヤボと呼ぶ。焼いた年にまく作物の種類により、ソバコバ、アワコバ、ヒエコバ、ムギコバなどの区別があるが、いずれも三 - 四年輪作した後には作付けをやめ、自生した茶を数年摘んでから使用を放棄する。その後は休閑させて再び森林化を促すというように、長い時間サイクルを見通した上で、はじめて成立をする農耕形態であった」(湯川洋司 1994: 19) と述べ、その自然資源の循環の上手な活用に注目するとともに、「山に焼畑をひらき、粟や稗・麦などの穀物を自給しながら、焼畑の産物である山茶や楮皮を商人に売って盆暮に必要な物を買ひ揃える現金を手にするという暮らしの立て方は、あたかも自然の推移のごとく嘘のない暮らしであったことは間違いない」と評していた(湯川洋司 1997: 94)。

そうした焼畑の「土地の利用、日照、土壌への理解と保全、林地の回復を待つ姿勢などは、高度経済成長期に求められた生産性と効率性と、そして何よりも成長を是とする思想とは遠いところにあるが、焼畑の仕事を支え持続させる上で不可欠だった。それは、「山の生き方」と言ってよい」とまで述べて、「それはいわば「脱成長」の生き方であり、山村生活の本然の姿に還ることでもある」としていた(湯川洋司 2011: 35)。このことから、湯川は山の暮らしには里とは異なる世界があり、そこでは異なるあり方、異なる暮らしが営まれていたと考えていたことが分かる。

だからこそ、過去のものになったと思われる焼畑に「私たちが学ぶに足る多くのことがまだまだある」のであり、「自然とどのようにうまく付き合っていたらよいのか」、「その答えは、最先端の科学に求めることもできるかも知れませんが、むしろもっと身近な私たちの足もと、すなわち先祖がどのように山と向き合い生活してきたのか、その暮らしぶりのなかに探ることが求められてくるのではないかと思います」ということになるのである(湯川洋司 1987: 78)。

それは生業という範囲だけにとどまらない。山口県下において行われる年祭の研究を通して湯川は、年祭を「支えた文化的基盤は循環する時間観念を持つことを特徴とすると言ってよいだろう。その文化的基盤とは、具体的には焼畑農耕を想定するのが考えやすい。それは親から子への世代交代とほぼ同じサイクルで森の伐採と再生とを繰り返しながら続けられてきた。循環する時間を生きる仕事であるからである。だが仮にそうでないとしても、そのような時間観念はやはり一年という年(とし)の観念では捉えきれない。森と山によった暮らしの所産に違いないと考えられる」と述べ、山には里とは異なる時空間が存在したことを指摘していた(湯川洋司 1997: 169)。

しかし、そうした里と異なった山の暮らしは「山村を支えてきたさまざまな仕事が急速

に価値を失い、姿を消したことが、山村の地位を低下させて」いくにしたがって失われていった(湯川洋司 1994: 25)。一方に山の暮らしの延長線上に生きる道があったが、多くの人たちは他方の山の暮らしから離脱し、自分たちの生活を里へと近づけていく方向を選び取っていった。その結果が現在の過疎化や高齢化に悩む山村のもととなっていると、湯川は指摘する(湯川洋司 1992: 51)。

そうした問題に悩む山村の現状を指摘しながら、「経済活動の活発さや文化の発信、情報の多様さ、都市は繁栄を享受しているが、果たして、そこに山の暮らし同様の誠実さはあるのか」、また、「受け継ぐものを受け継ぎつつ自らの勤め(責任)を果たすべく覚悟を決めた暮らしがあるのかどうか」と、都市の繁栄が果たして本当に正しい暮らしの幸福へとつながっているのかどうかを湯川はつねに疑問視していた(湯川洋司 2006: 48)。

この疑問の根底には現在の都市(発展)一辺倒のあり方への危機感があった。たとえば、暦と年中行事について述べた論文のなかで湯川は、「現代は個人の選択という名のもとに個人の意志が尊重され優先される時代にあるように見えるが、実はその個々人の選択肢は驚くほど限定されつつあり、固定化の方向に沿ってすすんでいるのが実情ではないか」と現代都市の持つ一元的な現状に危機感を示している(湯川洋司 2003: 36)。

こうした一元的な価値観が支配的な現状に対して、湯川は「都市は「人口の減少」という状態に騒ぎ、これが話題になるのは、「繁栄する」都市の社会や暮らしが、数値で測れるものが価値があり(数値の高いものが価値が高いと考える)、あるいは数値化できないものの価値を測ることができない、という状況に置かれているためではないのかと、豊かになったはずの都市の暮らしにおける貧困さを指摘していた(湯川洋司 2006: 48)。こうした一元的な価値観は湯川が、「私には、里の論理が山から人びとを引きずり下ろしたように見える。里が山を軽視していたことが、その根本にあると思うが、直接的には経済と効率優先の社会が山の社会を侵食し、無化し、そして日本全体をかたわにしてきたのではなかったか」と言及したように、里とは異なるあり方をもつ山の暮らしを変えたひとつの要因ではなかったかと思えるのである(湯川洋司 1991: 317)。

湯川は、里に対立するものとして山を見ていた。対立という言葉はふさわしくないかもしれない。山は、里とは異なる見方や考え方をもちながら暮らしを営んできた。いわば異文化としての山が存在していたが、里と隔絶していたわけではなく、また争っていたわけでもない。山は里とつねに関わりあっていた。異なるあり方をもちながらも、つねに関わり続けてきたのである。

湯川の問題意識の底には、「山と里との異質性」、つまりはふたつの異なるあり方の存在が、これまでの日本の社会や文化の健全性を保っていたのではないかという考えがあった(湯川洋司 1997: 11)。この山の暮らしのなかで生み出された異なる価値観の存在を確信するからこそ、湯川は「山村の暮らしが自ずから育て上げてきた「誠実さ」や「けなげさ」は、今の時代にこそ確保すべき価値をもつ事柄であると思う。その意味では、山村を消えゆく社会としてはならず、これまでの暮らしの質を継承する途を真剣に考える必要がある」

と指摘する(湯川洋司 2006: 48)。だからこそ、湯川にとって山を考えることは、現在の山の問題だけでなく、現在の里や都市を再考することにもつながっていくのである。

こうした里と異なる価値観をもつ山の暮らしが成り立たなくなったのは、もちろん外的な要因も多かった。だが、それとともに湯川は山に暮らす人たちの自分自身の暮らしへの理解の欠如があったのではないかと指摘する。それは、「思えば、過疎化とはそうした生活上の大小さまざまな自己選択を重ねた末に姿を現し始めたのだろうが、その根をさらに洗い出せば、山の人々が都市生活とは決定的に異なるはずの自らの暮らしの質に対する理解や認識を欠き、結果的に自信を失ったところに原因があったのではないか」(湯川洋司 1997: 8)という言葉や、五木村において水害を契機として、ダム開発賛成へと大きく傾いた動きを見ながらの「水害の有無に関わりなくいずれ村人は農業生活から離脱する道を選び取ることになったとも思える。なぜなら、村人の多くは焼畑を中心にした自らの生活を後れていると意識し始めていたように見えるからである」という発言によって端的に表されていた(湯川洋司 1999: 21)。

山の暮らしから離れることを、湯川は「離山(りさん)」という新しい言葉によって表現した。「離山」とは、「第一に、山村の住民の活動が山の間から離れること、これに伴い第二に、山村の住民の心が山から離れることの二つの側面を持つ。すなわち、これら二つを含めて「離山」と捉える」ことであり、そうした離山が起こる理由として、「山の暮らしを支えてきた山の力・価値を引き出せなくなったこと」および「山の仕事の消失に伴い人々の間の「共的」関係が失われていったこと」というふたつを挙げた(湯川洋司 2011b: 208-212)。そして、ダム開発によって多くの人が離山を余儀なくされた五木村を例にして、山村における開発について述べ、「「開発」は光と影の二面性をもち、どちらも村(開発が及ぶ地域社会)を変えていく。そのことを肝に銘じ、「開発」に対し村の自律性が失われないように足元を見ながら歩む姿勢が、今後ますます重要になるのではないか」と述べたのである(湯川洋司 2011a: 35)。

また、別の場所において「有形無形の資源を最大限生かして、村の自律性を損なわずに、村の外の世界と連帯していく」という提言を行っていた。この自律性は、経済的自立だけを指すのではなく、また、村落生活を行っていくための自律だけでもない。それは「先祖をふくめて自分たちが続けてきた山の暮らしの本質をよく理解し、それにゆるぎない自信と誇りを持つことがなによりも肝心となるのではないか」という言葉によって表現されているように、単純な経済的自立を意味するものではなく、個人個人の精神的な自立と自律をも含むものではないかと私は考える(湯川洋司 1991: 321-322)。それは常に里の動向によって左右される経済構造からの自立だけではなく、里とは異なるあり方をもつ自分たちの暮らしへの理解と誇りによって得られるものだと考えられるのである。

(2) 山村史資料集の刊行を湯川が目的とした理由について、湯川が10年以上通い、4冊の民俗誌を出した愛媛県惣川に関する発言はひとつ参考となる。それは以下のようなものであった。

惣川の民俗に関する印刷物には、森正文氏のご指導により愛媛大学農学部附属農業高等学校郷土研究部がまとめた『惣川の民俗』（一九六四年刊行）がある。衣食住をはじめ、通過儀礼、行事、伝説、民俗、芸能など惣川の暮らしを幅広く扱っており、優れた内容を持っている。加えて今から三十年以上も前のことがらを書き留めているので資料的価値も高い。また惣川の人々が自ら筆を執って作られた『惣川誌』（野村公民館惣川支館刊一九六五年）がある。これもさまざまなことがらを詳細に記述し、優れた内容を持っている。そのことは大いに誇ってもらってよいが、ただ誤植が散見されることが惜まれる。そのため何かの機会を捉えてこれを訂正したうえで復刻できるならば、惣川の来し方を振り返り、これからを考える上でよき導きの書になるに違いないと、私がかねがね思っている。

私も惣川の魅力にとりつかれて、山口大学の学生や東京家政学院大学の坪郷英彦先生らとともに惣川に通い、今は閉じられた「自在舎」に何日も泊まりながらたくさんの人々のお世話になって『惣川民俗誌』（1～4号、惣川の民俗を知る会発行、一九八九～一九九四年）を作ってきた。これらは惣川公民館のご協力をいただき、惣川全戸に配布したので、多くの方々にご覧いただけたものと喜んでいる。この仕事は今後も続けて、さらに惣川の人々の哀歓を感じとれるような民俗誌を作りたいと考えている（湯川洋司 1998: 105）。

五木村や会津を対象とした史資料集の編さん文書のなかにも、上記文章中、湯川が指摘したような誤植のあるものや、私家版であるがゆえに手軽に閲覧できない類のものが入っていた。こうしたものを集成することによって、村に暮らす人々に手軽に読んでもらえるようにという意志があったという想像は決して間違いではないだろう。

また、湯川が関わっていた『山口県史』の資料編1巻は、「民俗誌再考」と題して、山口県内の民俗に関わる論文を精選して収録している。そのあまり類を見ない試みについて、湯川は先行研究を十分にふまえ、その到達点を確認した上でさらに深化・展開を図ろうとする姿勢の具現化にほかならないとその目的のひとつを述べ、次いで民俗とはなにかという不断の問いかけの必要性について言及している（湯川洋司 2001: 11）。これは、民俗を暮らしに読み換えると「山村の「自律性」研究」における史資料集刊行の意図となるように思える。先人の暮らしを確認することで、自身の立ち位置をあらためて感じ、その上で自分たちの暮らしをこれからどうしていくかという暮らしの深化・展開を図ることにもなろうし、そうしたあり方はそのまま良い暮らしとはなにかということをも山に暮らす人々自身が問い続けることへとつながる。

そうした意味でやはり、「山村の「自律性」研究」において、この史資料集の刊行は必須だった。それは山に暮らす人々自身が、自分たちの来し方を見つめ、行く末を考える一助となりうるからである。そして、それを踏まえた上での「山村民俗生活誌」の刊行は、会津に1972（昭和47）年より通い、五木村に1975（昭和50）年より通い続けた湯川自身の手による実践であつたに違いない。40年以上もの間見続けた山村のあり方を湯川が描くとき、

それは湯川のいう「読んで心にひびく」、「暮らしの匂いを放つ」(湯川洋司 1997: 37) ものであったに違いなかった。山の暮らしの匂いを放つその民俗誌は、今日忘れかけられた嘘のない山の暮らしを描くはずだった。そうした民俗誌の存在は、民俗や暮らしの画一化への危機感が募る今日、自分たちのこれからの暮らしを考えていく上で、有用なものとなったはずである。

4 おわりに

名前を見られた時点でお気づきの方も多と思うが、私は湯川洋司の血縁にあたる。すでに本文で明らかなように、浅学の私が誌上に名を連ねているのは、ただそれだけの理由による。本稿執筆にあたっては、できるだけ家族としての感情を排除することを試みたが、それが失敗に終わったことは明らかである。湯川の研究業績とその正しい位置づけが、だれか他の方の手によってなされることを期待している。

本稿は、「残した仕事」と題した。目指した仕事とはせず、「残した」としたのは、湯川が志半ばで亡くなったことだけではない。また、私が湯川の仕事すべてを把握できていないというだけの理由でもない。湯川の残した 200 冊以上の調査ノートをはじめ、映像・音声・文書など、多くの資料が残された。これらをどうにかして役立つように公表したいと考えている。そうした意味でも、残した仕事なのである。もちろん、それは五木村・会津・惣川など湯川の通い続けた具体的な山村に限らず、湯川が見続け、言及し続けてきた現在について考えることも意味する。ただ、私と湯川は問題意識もその背景も、人間性もまったく異なる人間であるから、同じような研究ができるとは露ほども思っていない。ただ残された資料ぐらひは、どうにかしなければと思うのである。

湯川に限らず民俗学者が残した資料の扱いについては、私個人の問題ではなく、学会全体で考えていかなければならなくなるのではないかと思う。すでに大学や図書館などの公的な機関が研究者の蔵書諸々を引き取ってくれる時代は終わっている。他科学もそうだと思うが、とくに民俗学においては、書籍よりもその学者の残した調査ノートや映像・音声の記録類・収集した文書や民具の扱いが重要となる。それらはすでに見ることのできなくなった民俗の宝庫であるが、同時になにかよく分からないものの集合でもある。そうした資料をきちんと資料として使えるようにし、失われないようにすることが必要となる。そういう意味で、湯川の残した資料類は私個人の問題だが、民俗学者が記録し残した資料を今後どうしていくかという問題は、全体のものとなる。それは当然、資料の保存だけでなく、研究上への活用ということも含んでいる。

湯川はその点に非常に自覚的であり、病を得てより自身の著作集や調査ノートのまとめなどを行うことを企図していた。本文にて言及した「山村民俗生活誌」や山村史資料集はその試みのひとつでもあった。この試みのなかでとくに惜しまれるのは、湯川の構想していた写真民俗誌の構想だろう。五木村・会津・惣川を対象として、写真にキャプションをつけ、暮らしの移り変わりを具体的に示すとともに、そこで出会った話者についての記述

も載せる計画だったが、その実現は不可能になった。生活誌という名がつくのだから、そこには湯川が40年以上にわたって見続けてきた総体としての暮らしが描写されるはずだった。そこにどのような暮らしが描かれるはずだったのか。湯川の縁者ではなく、ひとりの民俗学徒としてとても残念に思っている。

謝辞

最後にこの場を借りて多くの方にお礼申し上げます。

父の著作をあらためて読み、父を知る機会を下さった山口大学教授坪郷英彦先生のご厚情に深く感謝申し上げます。また、坪郷先生には、父が病を得ての3年間、また没後も様々なことをご配慮いただきました。父に代わり、また親族を代表して伏してお礼申し上げます。また、山口大学の学生をはじめ、職員の方々にも厚くお礼申し上げます。父が研究を進めていく上で、学生のみなさまの新しい考えやあり方に触れること、また職員の方々の支えは必要不可欠なものだったと思います。

日本民俗学を学ばれる研究者の方々をはじめ、多くの方々の研究に啓発、また励まされながらの研究生生活だったと思います。父に代わり厚くお礼申し上げます。また、私個人としても多くの方からお声がけ頂き、励まされました。心よりお礼申し上げます。

そして、最後にはなりましたが、フィールドで父にお話下さったみなさまに深く感謝申し上げます。ひとえに皆様との出会いが湯川洋司という人間をつくり、研究にまい進させたのだと思います。受けた恩のすべてを返すことができないうちに、帰天することとなりましたが、皆様との出会いを無にせぬためにも、父の調査データをなんらかのかたちで後世に残し、役立てたいと思っております。よろしくご指導お願い申し上げます。

〔文献〕

- 湯川洋司, 1987, 「(三)焼畑」筑波大学さんぽく研究会編『山北町の民俗3——生業』山北町教育委員会。
——, 1991, 『変容する山村』日本エディタースクール。
——, 1992, 『ナガサキ豆本第十集 五木』昭和堂出版。
——, 1994, 「九州山地に明日を訊く」朝日新聞西部本社編『九州山地に生きる』葦書房。
——, 1997, 『山の民俗誌』吉川弘文館。
——, 1998, 「惣川の民俗のことなど」犬伏武彦監修『雲湧く村——惣川・土居家』アトラス出版。
——, 1999, 「開発とムラ——川辺川ダムをめぐる」日本民俗学会『日本民俗学』220。
——, 2001, 「総論」『山口県史資料編民俗1 民俗誌再考』山口県史編さん委員会。
——, 2003, 「暦と年中行事」新谷尚紀他編『暮らしの中の民俗学 一年』吉川弘文館。
——, 2006, 「山村民俗の変容と現在」『季刊東北学』7 東北芸術工科大学東北文化研究センター。
——, 2011a, 「近代山村開発史の民俗学的研究——熊本県五木村を事例として」平成 20~22 年度科学研究費補助金研究成果報告書(課題番号 20520710)。
——, 2011b, 「高度経済成長と山村生活の変化」『国立歴史民俗博物館研究報告』171。

所属：熊本大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程

E-mail アドレス：yukawa875@gmail.com